

## トーナメント制再考

大学選手権を単純トーナメントに戻すということは、朝令暮改のそしりを受けても仕方がないでしょう。会期の延長により、開催時期が試験期間に重なること、休み明けになって観客数が減ることは明白な既定事実です。ここで朝令暮改を非難するものではありません。ラグビー人気の低迷を打破するために真剣に考えられた対策の一つだったわけですが、無理は無理なのです。「無理が通れば道理引込む」愚を犯してはならないと思います。

大会の日程に関しては、W杯でも問題になるところですが、複雑で悩ましい課題です。勝敗を争うスポーツは、個人で楽しむ気持ちで始めたとしても、他と勝敗を争うように進展することによって、目標が定まり楽しみが増大します。試合は近くの相手に始まって遠くの相手へと拡大していきます。定期的に競技する約束がまとまれば、対抗戦の定着となります。テストマッチと称して大切な試合として取り扱われました。ラグビーは、対抗戦中心の競技として発達してきました。普及発展し、より広い地域のいくつかのチームがグループを組んで対抗戦を繰り返す形としてリーグ制が取り入れられるようになりました。テストマッチは一発勝負としての表裏を持っていましたので、home and away方式が取り入れられるようになりました。

さらに普及発展し、南半球の台頭とエネルギーにより浮かび上がってきたのがトーナメント制によるW杯です。その是非については色々と議論されましたが、No.1を決めることが、更なるラグビー普及発展の決め手であるという意見（needsと考えられた）が大勢となり、W杯が始まりました。W杯はラグビーグローバル化の道筋に咲いた花であり、世界の平和喜ぶ心と交通機関やマスメディアの発達の産物です。よい実を实らせる課題もあります。

試合に勝つということは2つの断面から評定することができます。単に点数の多い方が勝ちという1面です。ルールブック序文に競技の目的としてそのように書かれています。そして歴史と本質から、もう一つラグビー精神を活かす、誇りを志向するという面があります。公平に、オープン展開を競い、危険なことはしないことを誓い、主張を貫く面があります。後者はさらに拡大されてチームとして誇りとするプレーを実行する精神が生きていました。トーナメント制では勝ち残ることが第一という考えで戦われることは当然なこととなりましたが、それは全く否定できるものではありません。以上の両面からトーナメント制を生かし、各チームがシーズンの総決算にふさわしく、『only one』これだけはという誇りうる技量を発揮して、トーナメントを一戦一戦勝ち抜いていくこと、国立競技場が満員になることを期待しています。

2004.01.24

西川 義行